

武蔵野



武蔵野支局 〒180-0006
武蔵野市中町1の13の1 3F
電話 0422(51)3131
FAX 0422(51)3133
musasino@yomiuri.co.jp
都内版編集室
電話03(3217)1465・1466
江東支局 電話03(3631)6116
立川支局 電話042(523)4477
ホームページ
www.yomiuri.co.jp/local/

読者は
0120-4343-81

【広告】読売Palette 03(6272)9027
【折込チラシ】 0120-03-4343
【読売旅行】 03(5550)0666

2月19日(土曜日)
旧 1月19日<先勝>
★雨水★
通日 50
月齢17.9
(正午)
=東京標準=
日出 6.24 満潮 6.47
日入17.26 干潮 18.28
月出20.00 干潮 0.33
月入 7.55 満潮 12.43
(大潮)

「日本文化私観—坂口安吾エッセイ選」

安吾の言葉、語り口には、断片的に読むだけでは危険な誤解が生じやすい魅力と魔力があります。この1冊のエッセイ集を通して、戦前・戦中・戦後を貫く器の大きい人生観を味わうことをおすすめします。武蔵野で悩み、武蔵野で考え、武蔵野で開花した思想がそこにあります。



(講談社文芸文庫)

文人の武蔵野

坂口安吾(1906〜55年)の文学には、「黒谷村」(31年)や「木々の精、谷の精」(39年)から、「桜の森の満開の下」(47年)や「夜長姫と耳男」(52年)に至るような山を志向する作品があります。他方で、デビュー作の「木枯の酒倉から」(31年)や「竹藪の家」(31〜32年)、「狼國」(36年)のように野を志向する作品があります。山の文学は、松之山(新潟)

坂口安吾 ③



安吾は東京拘留所の前身である旧小菅刑務所について「不思議に心惹かれる眺め」と評している

安吾は東京拘留所の前身である旧小菅刑務所について「不思議に心惹かれる眺め」と評している。光と二十の私と(47年)、「お灸好き」(53年)などのエッセイでは、武蔵野の経験が回想的に語られています。1940年代に入ると、野を志向する文学は街を志向する文学へとシフトしていきます。「日本文化私観」(42年)では、「武蔵野の静かな落日はなくなったが繁々たるパラックの屋根に夕陽が落ち、埃のために暗れた日も曇り、月夜の景観に代ってネオン・サインが光っている。ここに我々の実際の生活が魂を下している限り、これが美しくなくて、何であらうか」とボスト

や鈴鹿(三重)、飛騨(岐阜)など様々な場所がモチーフになっていますが、野の文学の舞台はもっぱら武蔵野です。「二十一」(43年)や「風と

ここに生活これが美

武蔵野の美が文化として主張されます。安吾が見出したのは、伝統的な美ではなく必要のためにつくられた小菅刑務所(現東京拘留所)やドライアイス工場における「郷愁を

ゆりうゝかす逞しい美感」でした。安吾は、変容する武蔵野を過去の地としてふりかえっても、近代化や都市化を嘆くことはしませんでした。武蔵野に咲いた新しい花を称揚したのです。

(武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍)